
クルーア王と魔物の瞳

春矢トタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルーア王と魔物の瞳

【Nコード】

N2476U

【作者名】

春矢トタン

【あらすじ】

トータルクリエーターズ(<http://www.totalcraitors.jp/>)のファンタジー板にも投稿させていただいてます。

四つの王国がしのぎを削り、アンデランドの大王の座をめぐる戦いを繰り広げていた。

四つの国の名前はラスト、ナスタ、ファンスタ、そしてワナート。ワナート王国の王子、クルーアの願いは、圧倒的な力をもってして

アンデランドを統一し、そこに平和をもたらすことだった。そのため、クルーアは水龍の魔物と契約をする。

十年の月日がたち、ワナート王国の国王になったクルーアは、ラストとナスタを支配下に置き、ついに最後の砦、ファンスタとの戦いにのぞむ。

部屋の中で風が渦巻いている。とてつもなく広い部屋だった。薄暗く、そこは古くなり誰も立ち入ることのなくなった室内闘技場のよう。

部屋の中には美しい少年が立っていた。年のころは十代半ば。ゆるくウェーブのかかった短い金髪に、青い瞳。紺色の軍服に赤い外套を羽織っている。彼のそばには煤けた本がページを風に激しく繰られながら転がっていた。少年の立つ目の前には、青白く光る魔方陣が描かれている。風はそこから吹いているのだった。少年は汗を大量にかいていた。全神経を光の中心へむけ、自身は立っているのがやっとという状態なのである。

突然円の中心から水柱が噴き出した。その勢いは、まるで天から落ちる滝。そして水柱の中には人がいた。いや、人ではない。姿ははっきり見えないが、その強烈な瞳の色だけは分かる。燃えるような赤い瞳。少年はそこから決して目をそらさぬように、水柱をにらみつける。

やがて水柱は消え去った。青白く光る円の中心にいるのは魔物。彼の服は乾いており、部屋には一滴の水も残っていない。右耳には赤いピアス。まっすぐ切りそろえられた銀色の髪に、赤い瞳、手の甲には龍の刺青が彫られている。真っ白な装束をまとっていたが、その左肩は赤く染まっていた。左の耳朶から、どうしてか血がぽたぽたと落ちている。

「水龍の魔物、コート。我はワナート王国第一王子クルーア。願うはアンデランド大王の座。ラスト、ファンスタ、ナスタ、他の三国の追隨を許さぬ力を我にもたらせ」

疲れ果てた体で、声が震えぬように力を振り絞り、少年、クルーアは言葉をつむぐ。

「ワナート王国第一王子、クルーア、貴様の血と心臓を対価に、そ

の願い聞き届けよう」

その言葉を聞くと、クルーアは右の手のひらをナイフで切り裂き、円の中へ血をたらす。

円が真つ青に燃え上がった。

「契約は完了だ。炎使いのクルーア王子。水と炎、仲良くやろうか」
風はやみ、青い魔方陣も消え去っている。

クルーアは、手のひらから血を流したまま微笑んだ。

クルーアは戦場へ向かう馬の上で、十年前を思い起こす。かつての王子クルーアは、ワナート王国の王になっていた。ラスタ王国とナスタ王国は、建前上ワナート王国を盟主として同盟を組んだが、実際はワナートに吸収されたも同然。今やアンデランドの大半はワナート王国の支配下にあった。そしてクルーアは最後の砦、ファンスタ王国との戦いへと向かっている。この戦いに勝てば、クルーアは名実ともにアンデランド大王の地位を手に入れる。

「武者震いか、クルーア」

隣の馬から、クルーア憑きの魔物、コートが声をかけた。

「とうとうこの日が来た」

クルーアは手綱を握り締める。

「アンデランドの統一。コート、僕の願いが今、叶えられようとしている」

「気が早いようだな」

「自信がないのか」

「口は慎んだほうがいいという忠告だ」

「ふん。今日は左耳が痛まないといいな」

コートの左耳に残る、醜くひきつった傷跡を見やると、クルーアは手綱を引いて馬の歩みを止める。ワナート軍もそれに続いた。

「さあ、戦場だ」

クルーアは草原をはさみ対峙する軍を見据える。

軍の数は、ファンスタ軍が圧倒している。それは分かりきっていたことだった。国土の小さいファンスタは、すべての成人男子に軍役義務を課す。一方、ワナートに存在するのはわずかな職業軍人のみ。しかしそんなことはクルーアにとってとるに足らないこと。たとえファンスタの軍が一万で、こちらの軍が十だとしても、ワナートの勝利は変わらない。コートがいる限り。クルーアはそう確信している。

ファンスタの軍が剣を抜いた。それを合図にコートが空へ飛び上がる。晴れ渡った空に、突然大きな水の球が無数に現れた。ただの水だけれど、信じられないほどの加速をしてぶつかってくるその水は鉛球だ。一番楽で、一番効率的な方法。すべての騎兵にその水を命中させ落馬させる。そこをワナート軍が一掃すれば、あつという間に敵の制圧は完了するのだ。今回もきつと勝利は揺るがない。

そのとき、すさまじい破裂音が空に響き渡った。それは、コートの武器がすべて割られる音だった。

「あせるな！ 隊を乱すんじゃない！」

ざわめく自軍に、クルーアは叫ぶ。

「いいか、動くな。まだ距離がある。コートが動く前に、ファンスタ軍に近づくな！」

クルーアはコートへ向き直る。

「コート！ どうした！ 二発目を！」

コートは動かない。地面から立ち上がることができず、ひざを突いている。

「一度攻撃を破られたくらいで崩れるな！ コート！」

クルーアはのどが焼けるほど、力の限り叫んだ。しかしコートは動かない。

「コート！」

「お前の負けだ、ワナート王国国王、クルーア！」

声の主は、草原の向こう側、ファンスタ軍の先頭にいた。

「お前のお気に入り、立たないんじゃない。立てないんだ。くも

の系のせいだな」

いやらしい笑みを浮かべ声高に語る男の名はキース。フランス王国の国王。短い黒髪に、黒の瞳。深緑の軍服に黄色の外套を羽織り、背中には大振りの剣を差している。

「どういうことだ！」

「魔法を使うやつと契約をしているのが、お前だけだと思うなよ！」
キースがそういうと、彼の馬の後ろから、幼い女の子がひょっこり現れた。ゆるく波打つ豊かな金髪。灰色のワンピースを着ていて、年のころは五歳になるかどうかというところ。長いまつげに縁取られた目元は彼女の可愛らしさを甘やかに演出しているが、その瞳は赤く、鋭い光を宿していた。

「……そんな幼い子供を戦場に……」

「察しが悪いぜ、ワナート王国の王様ともあるうお方がな！ ああ、そこからじゃ瞳の色まで見えないか。こいつはただの幼女じゃねえ。お前のお気に入りとおんなじだ。魔法を使う、魔法幼女……」

そこまで言う、キースはいきなり地面にたたきつけられた。

「その呼び方をするなど、何度言ったらわかるの！」

「つてえ！ レンス！ 契約主様に何しやがる！」

立ち上がるなりキースが叫ぶ。

「勘違いもそこまでいくと清々しいわ。あなたみたいな三流と、私は契約して、あげてるのよ。そのことを忘れないで」

「そっちから持ちかけてきたくせに、何言ってる！」

「利害が一致しただけのこと。あなた、私がいなかったら、今頃王様なんてやってないわよ」

レンスと呼ばれた幼女は、キースの方など見向きもしないでワナート軍を向き直る。いや、正確には、いまだ地面に縛り付けられているコートを。

「私は、ただコート兄さんを連れ戻したいだけ」

レンスは高く飛び上がると、コートの傍に舞い降りた。

「お久しぶり、コート兄さん。会いたかった。とつても」

コートは自由を奪われていた。しかし赤い瞳はギラギラと輝いて、まっすぐレンスを見据えている。

「まさかお前がこっちに来るなんて思わなかった」

「私、気が短い。五十年も、その王様が死ぬのを待つなんてできない」

「このときのために、お前は僕の耳を噛み千切ったのか」

「結果的に今役立ってるだけよ。あの時はただ、コート兄さんに忘れられたくなくて必死だったの」

あの時というのは、十年前にさかのぼる。コートがクルーアに召還されたときのこと。レンスとコートはもちろん実の兄弟ではないけれど、レンスはコートを兄のように、それ以上に慕っていた。そして、コートが人間に指名されたとき、レンスは癇癪を起こしたように泣き叫んだ。

「行ったらだめよ！ 私には分かるわ。あの王子、自分が死ぬまであなたを離さない契約をするの。五十年も、百年も、コート兄さんと離れるなんて、私耐えられない！」

「それだけ上等なお客ということだよ。それに、王家の血を引いている。二百年ぶりの食事には、ふさわしい」

コートは可愛いレンスを抱きとめる。レンスは目に涙をいっぱい溜めながら、必死にコートへしがみついた。

「私、コート兄さんが大好きよ」

「僕も、レンスが大好きだよ」

「私のこと、忘れないで」

「忘れないよ」

「約束してくれる？」

「ああ」

そういつてしゃがみこむと、コートはレンスの前髪をかきあげ、

そこにキスをしてやった。

「おまじないだ。僕がいなくても、これで百年、レンスは寂しくならない」

コートはそう言っで、レンスの頬を両手で挟みこんだ。

「足りないわ。全然」

レンスはコートの首へ腕を巻きつける。

「っ！」

そしてコートは、予期せぬ痛みで顔をしかめた。

「レンス！」

コートがとつさに抑えた左耳からは、血がだらだらと流れ落ちていた。パツとコートから離れると、レンスはパカツと口をあける。小さな舌の上には、コートの左耳についていたはずの赤いピアスが乗っていた。そしてその赤いのは、石の部分だけではない。

「この先百年、コート兄さんの耳が痛みで疼きますように。痛みと一緒に、私のことを思い出しますように」

可憐に微笑むと、レンスはごくりとそのピアスを飲み込んでしまった。

「レンス、君はいつの間にそんな魔法を覚えたんだ」

「私が、コート兄さんと出会っ前」

「お前は本当に恐ろしい」

コートは苦笑する。

「僕は行く。王子の力が尽きてしまっ前に」

炎がぶわりとコートの体を包み込む。その炎が消えると、もうそこにコートはいなかった。

「レンス、昔話もいい加減にしる。とつとつワナート軍をつぶしにかかれ」

キースの頬に、ピツと一筋の傷ができた。

「私に指図しないで」

「な！」

「あなたとの契約は、ワナート軍を破るのに力を貸すことだけ。やり方に口は出させない。私を縛り付けたいなら、心臓差し出すくらいに度胸をつけることね！」

レンスは、今度はクルーアへ視線を動かす。

「ワナートの王様。もう気づいてるかもしれないけど、私はくもの魔物。糸で絡めとって、相手の自由を奪う。それに、この糸にはコート兄さんの血を混ぜ込んであるの。どんなに兄さんの力が強くて、この糸には効果がないわ」

見えないくもの糸がコートをより強く締め付けたようで、彼が低くうめく。

「私あなたが嫌いよ。私からコート兄さんを奪った！ あなたの命を奪って、兄さんを自由にする」

今までピクリとも動かなかったコートが立ち上がった。

「でも、ただじゃつまらない。あなたの大好きな、コート兄さんの手にかかるといいわ！」

レンスはコートの体を操り、剣を抜かせる。コートはなされるがまま、その切っ先をクルーアに向けた。

「動けないでしょう。もうワナート軍はすべて私の糸につかまっているのよ」

レンスの瞳に勝利の色が浮かぶ。

「小娘、おしゃべりはもう十分か」

クルーアが、まったく焦っていない、のんきな声でレンスへ語りかけた。

「随分余裕ね。これから殺されるっていうのに」

「余裕なんてまったくないさ。笑いをこらえるのに必死でね」

にやりと顔をゆがめると、クルーアの周りに炎の渦が現れた。

「炎で糸を焼ききるつもり？ 無駄よ。人間の魔力じゃどうしようもできないわ」

「片腹痛いとはこのことだな」

炎が勢いを増し、コートを包み込む。炎が消えたとき、そこにもうコートはいなかった。

「えっ！」

「幼子の手を最後まで聞いてやるとは、クルーアも人がいいな」

コートは、クルーアの後ろに立っていた。

「レンス、お前にはクルーアが人間に見えるのか」

「どうということ！」

レンスが叫ぶ。

「こういうことだ」

クルーアがゆっくりと瞬きをした。そこに現れたのは、ヘテロの瞳。青かった右目の色は、赤く変わっていた。

「クルーアは魔物と人間の、ハーフだよ。魔物の母親の血を濃く受け継いでいて、本当は僕より魔力が強い」

レンスはたじろぎ、手を口に当てる。

「じゃあ、どうしてコート兄さんと契約をしたの！ こんな島ひとつ手に入れるの、簡単でしょう！」

「魔物は、たとえハーフでも人間の王にはなれないんだよ。私は人間のふりをしなければならぬ」

クルーアはまぶたを伏せ悲しげにつぶやいた。

「そんなの、力でどうにでもなるわ！」

「違うんだ。それじゃ意味がない。私がほしいのは、平和に統一されたアンデランド。四つの王国が大王の座を巡りせめぎ合う、戦乱の世の中はもういい。力で力を押さえつけるのは悲しいことだ」

「矛盾してるわね。あなたが今やってることは何？」

「まったくね」

そう言うクルーアの右目は、青く戻っていた。

「ちょっと君はおとなしくしていてね」

クルーアは炎で檻をつくり、レンスをそこに閉じ込めた。諦めたのか、もうレンスは暴れない。

「さあ、残りのファンスタ軍を倒して、コート」

クルーアは顔を上げるとコートへ向き直った。

「キース率いるファンスタ軍は、もう戦意を喪失しているようだ」「離れたところから三人のやり取りを見ていたファンスタ軍から、士気は感じられない。先頭に見えるキースは、顔を青ざめて震えている。」

「……コート。ファンスタ軍、あれは何人いるように見える」

「千人ぐらいか」

「口止めできると思うか」

「温厚に？」

「ああ」

「無理だろうな」

その言葉にクルーアはため息をついた。

「仕方がない、始末しろ」

クルーアはそう言うのと、ファンスタ軍に背を向けた。

「ちょっと待ちなさいよ」

おとなしくしていたレンスが口を挟む。

「キースを殺さないで」

「どうした。あんなやつと命をかけた契約したわけじゃないだろ」

コートがいぶかしげに聞く。

「もちろん。でも、私まだキースから対価をもらってないの。今殺されたら、私ただ働きよ」

「それなら今とつとと受け取って来い。どうせあの背中の中何かなんだろ」

コートはキースの方を指差す。

「そうよ。察しがいいのね。でも、鈍いわ」

「どうということだ」

レンスは大げさに頭をたれてため息をついてみせる。

「コート兄さん、ファンスタ軍を皆殺しになんてしたくないんですよ」

「随分なめられたものだな。僕は彼らに情けなんてかけない」

「誰も、兄さんがフアンスタに同情してるとは思っていないわ」

「ならどうしてそんなことを言う」

「そこにいる王様よ。クルーア王、いいえ、クルーア大王が悲しんでる。彼が悲しむのを、兄さんは見たくないんでしょ。大好きだから」

「たわ言をいうな。それに、あいつらの始末を、他にどうしろというんだ」

「私がかするわ。別の国につれてっちゃえばいいんでしょ」

「……そうだが、なぜそこまでする」

「コート兄さんが好きだから。ね、王様、この檻はずして。別に怖くないでしょ、私なんて」

クルーアは何も言わなかったが、炎の檻は勝手に消えた。

「ありがとう」

そう言うのと、レンスはコートのそばへ駆け寄ってしがみついた。

「私、コート兄さんが大好きよ。だから兄さんを傷つけない」

「僕にクルーアを殺させようとしたのにか」

「あの時は、コート兄さんを取り戻せると思ってたの。クルーアも憎くてたまらなかった。でももう無理って分かった。私にクルーアは殺せないし、兄さんは戻ってこない。それに同属って分かった。しゃがんで」

コートは言われるままレンスに顔を近づける。

「でも、この呪いは解かないわ」

レンスはコートの左耳に触れた。そこは古い傷跡だというのに、熱を持ってうずいているようだった。

「兄さんが戻ってくるまで。私のことは忘れさせない」

「わかったよ」

コートはレンスをやさしく抱きしめる。

「フアンスタ軍は、海をこえてサングリカに連れて行くわ」

レンスはコートの肩に顔を擦り付けるとすぐに離れて、くるりとフアンスタ軍へかけ戻っていった。

「……いい子だな」

クルーアがいつの間にかコートの傍に来ていて、ポツリと言った。
「自分を殺そうとしたやつに対して言う台詞だろうか」

「ふん。さて、後は自軍の始末だ」

クルーアは後ろに控える、百人ほどの軍に向き直った。

「お前らには選ばせてやる。私が魔物の血を引くことを口外しないと約束すれば、私に最も近い臣下として確かな地位を与えよう。しかし、もし少しでも妙な噂が私の耳に入ったときは、お前ら全員の命はない。できない者は今ここで名乗り出る。この場で始末してやる。早いか遅いかの違いだ。くもの小娘は生意気なことを言っていたが、私はやるぞ」

誰も声ひとつ上げなかった。

「お前たちが賢明であることを祈るよ。さあ、ファンスタ城へ行こう」

クルーアは馬へ乗ると、草原を駆け抜ける。コートや、その他のワナート軍もそれに続いた。

ファンスタは国王を失ったため、建前の同盟も組めず、名実ともにワナート王国のひとつとなった。アンデランドを統べる大王となったクルーアは、王室の玉座に深く腰掛け、虚空を見つめる。日はとつくに落ち、部屋には小さなろうそくの明かりがぼっかりと浮かんでいるだけだ。

「休まないのか、クルーア」

玉座の後ろの影から、コートが近づいてくる。

「明日はラスタ、ナスタ王国と、アンデランドの平和をたたえる宴があるぞ」

「分かっている」

「願いが叶って嬉しくないのか」

そう問われて、クルーアは目を閉じる。

「私がお前と契約をしたとき、私は自分の理想を疑ったことがなかった」

「今は違うということか。少し気が弱くなっているんじゃないか」

「今に限ったことじゃない。ラスト、ナスタを支配下に入れ、勢力を広げるとともに、自分のやっていることに対する空しさは、ごまかしきれなくなっていた」

「お前が望むとおりの世の中になっているぞ。ワナート支配の下、アンデランドで無駄な血は流れなくなった」

「それは私が強いから。そしてお前が強いから。今、ワナートは絶対的な強さを持っている」

「すべてお前の願いどおりだ。ラスト、ナスタ、ファンスタ、他の国の追隨を許さぬ力、それによるアンデランドの統一」

「私の寿命は人間と同じだよ」

「それは知っている」

「私が死んだ後、ワナートに力は残るか」

「コートはそれには答えない」

「物心ついたときから、アンデランドの平和を創ることは私の使命だと思っていた。王家に生れ落ち、魔物の血を引く、絶対的な力」

そして私は全てを支配し、ここに平和をもたらすことができた」

クルーアは右の手のひらを天井へ向ける。そこには、コートと契約をしたときの傷跡が今も残っていた。そして小さな火を点す。

「しかし、それは永遠ではない。それどころか、うたかたよりも儚い。私が生きている間だけでも続けばいいだろう。私と同じ力を持つものがないとなぜ言えるのか。キースのように、魔物と契約するものもいるだろう」

一つ目の炎を消すと、クルーアは隣にもうひとつ小さな炎を点した。そして、すぐに三つ目、四つ目と、次々火の玉を浮かべていく。今や王室は無数の炎に照らし出されていた。

「一人が力を持てば、他の者もその力を求める。繰り返しなんだよ。力で力を抑えても、結局は振り出しに戻ってしまう。それどころか

……」

小さかった炎は、クルーアの言葉とともに少しずつ大きさを増していく。

「クルーア。部屋が燃える」

コートの声に我に返り、クルーアは全ての炎を消し去った。再び王室の明かりは、小さなろうそくだけになる。

「どんなに力があってもだめなんだ。平和を謳い、正義を掲げてもその力がやがてさらなる混乱を招くなら、なんの意味がある。絶対正義なんてありえない」

絞りだすように言うクルーアの正面に回りこみ、コートはその頬を両手で挟みこんだ。

「クルーア」

「私をあやすつもりなのか」

子供にするように、コートはその頬を撫でる。

「賢明な者ほど、身動きが取れなくなるのはどうしてなんだろうな」
コートはクルーアに覆いかぶさるようにすると、その唇に口付けた。

「悪い夢を見ない、まじないだ」

恨めしげに見上げるクルーアの両目を、コートはその手で覆ってしまう。手を離れたとき、クルーアはすうすうと寝息を立てていた。コートはその体を抱き上げると、寝室へと運んでいく。

王室の扉が閉まるとろうそくの炎がふっと消え、そこにはただ静かな暗闇があるだけだった。

（後書き）

このあとサングリカに連れて行かれたキースたちは、ワナートへの報復を願って、サングリカ王アンリに助けを求めるんですね。そんなでクルーアとアンリがドンパチ。なその後をいつか書きたいです。

ここに投稿するのはすごく久しぶり。自分の趣味を詰め込みました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476u/>

クルーア王と魔物の瞳

2011年6月21日20時10分発行